

失う

高崎市立長野郷中学校

三年 根岸 優貴

当たり前だったものを、突然失う。そんな経験はありますか。

私は中学一年の修了式翌日の朝、病院のベッドに横たわっていました。両手に鋭い痛みを感じ、目をやると、巻かれた包帯。一瞬の戸惑いのち、目に入ってきたのは全身の映る鏡。痛みにくらえながら鏡の前に行くと、そこに映るのは顔まで包帯の巻かれた自分。私の思考は止まり、頭は真っ白になっていました。

眼科の先生が来て、いろいろな話をしてくれましたが、私の頭には何も入ってきません。先生の話が右から左へ抜けていく中、唯一入ってきた言葉がありました。それは、中学生の私にとって、とても重く、耐え難いものでした。

「君の左目は、もう見えることはない。」

そう、私が失ったものとは、左目の視力です。これまでは当たり前に見えていた左目が、もう見えなくなってしまうのです。

現実を受け止められない中、両親が病院に来て、ことの顛末を話してくれました。友人と遊びに行った帰りに事故にあったこと。友人の父が車に乗せてすぐに病院に連れていってくれたこと。そのおかげでなんとか命はつながったこと。両親の話を聞きながら、私は夢から覚めていく感覚を持ったと同時に、大きな絶望を抱きました。病院での生活が数日たったある日、私宛ての手紙が届きました。手紙には、私を元気づける言葉がたくさん書いてありました。中には、

「ファイト一発」

という、思わず笑みがこぼれるようなものもありました。手紙を読み終えたとき、私は、久しぶりに笑顔を取り戻すことができました。

一週間後、病院の先生や看護師さんの献身的な介助もあり、退院することができました。久々に吸う外の空気

のにおいや、自宅に戻ってきたときの安心感で、体の状態とは裏腹に、私は幸せな気分になっていました。

ですが、やはり失ったものは大きく、様々な困難が待ち受けていました。ハサミを使うとまっすぐ切れない。給食がうまく盛れない。人や物にぶつかってしまふ。友達にぶつかってしまったときには、とても申し訳ない気持ちになりました。

しかし、その困難は周囲の優しさで乗り越えることができました。給食当番を快く変わってくれたクラスメイト。私の見えない左側をさりげなく歩いてくれた友人。何も言わずとも、代わりにハサミで切ってくれた先生。周囲から寄せられた優しさに、感謝と感動の思いがこみ上げてきました。

傷が一通り治った後、私は、一層周りを見ることを意識して生活を始めました。友人をよく見て、先輩後輩をよく見て、先生をよく見て。そうすることで、困ったり不安になったりする姿だけでなく、優しさや思いやりも見えるようになりました。片目を失ったことで確かに視野は狭くなりました。ですが、両目があった頃よりも

人を心で見ることが多くなりました。

当たり前だと思っていたものを失ってしまったとき、人は挫折してしまうでしょう。不安を感じる日は決して少なくありません。失ったものは返ってはきません。当たり前だと思っていた日常の大切さは、失って初めて気づくのです。いつも通りに登校できること、友人と笑いあえること、それらは決して当たり前なことではないのです。

ですが、未来を失ったわけではありません。大切なのは、失った先に何を見るか。決して未来は消えていないのです。私は今回の経験から、人の命を救う仕事に就きたいと思いました。私の命が救われ、こうして生きていられるように、私も未来をつなぐ仕事をしたいです。細く、わずかな光でも、手にするのは自分自身です。

皆さん、手で左目を隠してみてください。これが私に見える世界です。私は、今ある目で、そして心で、前を向いて生きていきます。